

第4問 次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。なお、設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。

(配点 50)

A  
聴<sup>ケバ</sup>雷<sup>(注1)</sup>霆<sup>てい</sup>於<sup>テ</sup>百里之外<sup>ニ</sup>者、如<sup>ク</sup>鼓<sup>スルガ</sup>盆<sup>ヲ</sup>、望<sup>スバ</sup>江河於千里之間<sup>ニ</sup>者、  
如<sup>キハ</sup>縈<sup>マシラフ</sup>帶、以<sup>テ</sup>其相去之遠<sup>ヒ</sup>也。故居<sup>キリテ</sup>于千載之下<sup>ニ</sup>而求<sup>ムルニ</sup>之<sup>ヲ</sup>于千  
載之上<sup>ニ</sup>、以<sup>テ</sup>相去之遠<sup>キ</sup>而不知<sup>レバ</sup>有<sup>ルヲ</sup>其變、則猶<sup>ホ</sup>刻<sup>ミテ</sup>舟<sup>ニ</sup>求<sup>ムルガ</sup>劍。今之  
所<sup>ハ</sup>求<sup>ムル</sup>、非<sup>ザルモ</sup>往者所<sup>レ</sup>失、而謂<sup>おもへり</sup>其刻<sup>ミシハ</sup>在此<sup>ニ</sup>、是所<sup>ヨリテ</sup>從<sup>おツル</sup>墜<sup>ト</sup>也<sup>上</sup>。豈<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>惑<sup>ヒナラ</sup>乎<sup>ヤ</sup>。

今夫江戸者、世之所<sup>レ</sup>称<sup>スル</sup>名都大邑<sup>(注4)</sup>、冠蓋之所<sup>レ</sup>集<sup>マル</sup>、舟車之  
所<sup>ニシテ</sup>湊<sup>マツ</sup>、実<sup>ニ</sup>為<sup>タル</sup>天下之大都会<sup>ニ</sup>也。而其地<sup>レドモ</sup>之為<sup>レ</sup>名、訪<sup>レ</sup>之於古、未  
之聞<sup>ル</sup>。豈<sup>ニ</sup>非<sup>ズ</sup>古今相去<sup>ルコト</sup>日遠<sup>ヒビニ</sup>、而事物之變<sup>モ</sup>亦在<sup>ルニ</sup>于其間<sup>ニ</sup>耶<sup>ヤ</sup>。蓋<sup>シ</sup>  
知<sup>ル</sup>、後之於<sup>レ</sup>今<sup>ニ</sup>、世之相去<sup>ルコト</sup>愈<sup>ク</sup>遠<sup>ク</sup>、事之相變<sup>スル</sup>愈<sup>ク</sup>多<sup>ク</sup>、求<sup>ムルモ</sup>其<sup>ノ</sup>所<sup>ヨ</sup>欲<sup>スル</sup>聞<sup>カント</sup>  
而<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>得<sup>タ</sup>、亦猶<sup>ホ</sup>今之於<sup>レ</sup>古<sup>ニ</sup>也。

B  
C

吾<sup>ひそかに</sup>窃<sup>リ</sup>有<sup>ズル</sup>感<sup>これに</sup>焉。『遺聞』<sup>(注6)</sup>之書、所<sup>より</sup>由<sup>テ</sup>作<sup>ル</sup>一也。

(新井白石『白石先生遺文』による)

(注)

- 1 雷霆——雷鳴。
- 2 鼓<sup>レ</sup>盆——盆は酒などを入れる容器。それを太鼓のように叩くこと。
- 3 刻<sup>レ</sup>舟求<sup>レ</sup>劍——船で川を渡る途中、水中に劍を落とした人が、すぐ船べりに傷をつけ、船が停泊してからそれを目印に劍を探した故事。
- 4 大邑——大きな都市。
- 5 冠蓋——身分の高い人。
- 6 『遺聞』——筆者の著書『江関遺聞』を指す。

問1 波線部(ア)「蓋」、(イ)「愈」のここでの読み方として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ

選べ。解答番号は

29

・ 30

。

(ア)

29 「蓋」

- ⑤ ④ ③ ② ①
- けだし すなはち まさに はたして なんぞ

(イ)

30 「愈」

- ⑤ ④ ③ ② ①
- すこぶる はなはだ かへつて いよいよ しばしば

問2 傍線部(1)「千載之上」・(2)「舟車之所湊」のここでの意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 31 ・ 32。

(1) 「千載之上」

31

- ⑤ はるかな未来
- ④ 多くの書籍
- ③ 重たい積み荷
- ② 遠い過去
- ① 高い地位

(2) 「舟車之所湊」

32

- ⑤ 船頭や車夫の居住区
- ④ 事故が多い交通の難所
- ③ 水陸の交通の要衝
- ② 荷物を積みおろしする港
- ① 軍勢が集まる拠点

問3

傍線部A「聴雷霆於百里之外者、如鼓、盆、望江河於千里之間者、如縈、帶、以其相去之遠也」とあるが、それはどういふことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

33。

① 聴覚と視覚とは別の感覚なので、「雷霆」は「百里」離れると小さく感じられるようになるが、「江河」は「千里」離れないとそうならないということ。

② 「百里」や「千里」ほども遠くから見聞きしているために、「雷霆」や「江河」のように本来は大きなものも、小さく感じられるということ。

③ 「百里」離れているか「千里」離れているかによって、「雷霆」や「江河」をどのくらい小さく感じるかの程度が違ってくるということ。

④ 「百里」や「千里」くらい遠い所にいるおかげで、「雷霆」や「江河」のように危険なものも、小さく感じられて怖くなくなるということ。

⑤ 空の高さと陸の広さとは違うので、「雷霆」は「百里」離れるとかすかにしか聞こえないが、「江河」は「千里」でもまだ少しは見えるということ。

問4 傍線部B「豈不惑乎」とあるが、筆者がそのように述べる理由は何か。「刻舟求劍」の故事に即した説明として最も適

当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

34。

- ① 劍は水中でどんどん錆びていくのに、落とした時のままの劍を見つけて出せると決めてかかっているから。
- ② 船がどれくらいの距離を移動したかを調べもせずに、目印を頼りに劍を探し出せると思い込んでいるから。
- ③ 大切なのは劍を見つけないことなのに、目印のつけ方が正しいかどうかばかりを議論しているから。
- ④ 目印にすっかり安心して、船が今停泊している場所と、劍を落とした場所との違いに気づいていないから。
- ⑤ 船が動いて場所が変われば、それに応じて新しい目印をつけるべきなのに、怠けてそれをしなかったから。

問5 傍線部C「其地之為名、訪之於古、未之聞」の返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを、

次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 35。

- ① 其地之為<sub>レ</sub>名、訪<sub>レ</sub>之於<sub>レ</sub>古、未<sub>ニ</sub>之聞<sub>一</sub>  
其の地の名を為<sub>な</sub>すに、之を訪ぬるに、古に於<sub>お</sub>いてするは、未<sub>ゆ</sub>だ之<sub>く</sub>を聞かず
- ② 其地之為<sub>レ</sub>名、訪<sub>ニ</sub>之於<sub>レ</sub>古、未<sub>ニ</sub>之聞<sub>一</sub>  
其の地の名<sub>た</sub>為<sub>る</sub>、之を古に訪ぬるも、未<sub>だ</sub>之<sub>を</sub>聞かず
- ③ 其地之為<sub>レ</sub>名、訪<sub>ニ</sub>之於<sub>レ</sub>古、未<sub>レ</sub>之聞<sub>一</sub>  
其の地の名を為<sub>す</sub>に、之きて古に於<sub>いて</sub>訪ぬるも、未<sub>だ</sub>之<sub>か</sub>ざるを聞<sub>く</sub>
- ④ 其地之為<sub>レ</sub>名、訪<sub>ニ</sub>之於<sub>レ</sub>古、未<sub>ニ</sub>之聞<sub>一</sub>  
其の地の名<sub>た</sub>の為<sub>に</sub>、之きて古に於<sub>いて</sub>訪ぬるも、未<sub>だ</sub>之<sub>を</sub>聞かず
- ⑤ 其地之為<sub>レ</sub>名、訪<sub>ニ</sub>之於<sub>レ</sub>古、未<sub>レ</sub>之聞<sub>一</sub>  
其の地の名<sub>た</sub>為<sub>る</sub>、之を古に訪ぬるも、未<sub>だ</sub>之<sub>か</sub>ざるを聞<sub>く</sub>

問6 傍線部D「遺聞」之書、所<sub>レ</sub>由<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>也」とあるが、『江関遺聞』が書かれた理由として最も適当なものを、次の①～⑤の

うちから一つ選べ。解答番号は

36

- ① 江戸は大都市だが、昔から繁栄していたわけではなく、同様に、未来の江戸も今とは全く違った姿になっているはずなので、後世の人がそうした違いを越えて、事実を理解するための手助けをしたいと考えたから。
- ② 江戸は政治的・経済的な中心となっているが、今後も発展を続ける保証はないし、逆にさびれてしまうおそれさえあるので、これからの変化に備えて、今の江戸がどれほど繁栄しているかを記録に残したいと考えたから。
- ③ 江戸は経済面だけでなく、政治的にも重要な都市となったが、かつてはそうではなかったため、江戸の今と昔とを対比することで、江戸が大都市へと発展してきた過程をよりはっきり示したいと考えたから。
- ④ 江戸は大都市のうえに変化が激しく、古い情報しか持たずに遠方からやってきた人は、行きたい場所を見つけるにも苦労するので、変化に対応した最新の江戸の情報を提供し、人々の役に立ちたいと考えたから。
- ⑤ 江戸は大きく発展したが、その一方で昔の江戸の風情が失われてきており、しかもこの傾向は今後いつそう強まりそうなので、昔の江戸の様子を書き記すことで、古い風情を後世まで守り伝えたいと考えたから。